

## 地域・学校防災教育セミナー 実施状況

日 時 平成28年11月2日（水） 13:15～17:15

場 所 千葉県教育会館

参加者 221名

### 1. 実施概要

南三陸町立志津川中学校教諭の佐藤公治先生に、地域と学校の連携による防災教育について、御講演いただきました。

また、命の大切さを考える防災教育公開事業（県教育庁事業）を実施した小中学校、高校及び特別支援学校の8校による事例報告の発表がありました。

発表後は、佐藤先生による講評のほか、来場者との意見交換が行われました。

### プログラム

No.	演 題 等	講師及び発表者
1	講演 「地域の危機管理を、学校を核に考える」	南三陸町立 志津川中学校教諭 佐藤 公治 氏
2	防災教育モデル事業事例報告	
	（1）津波からの避難 ～自らの命を守り抜くため 「主体的に行動する」児童の育成	御宿町立御宿小学校 教諭 重田 めぐみ 氏
	（2）帰宅困難・引き渡し ～自らの生命や安全を 守ることができる子どもの育成～	市原市立若宮小学校 教諭 宮内 聡穂 氏
	（3）帰宅困難・引き渡し ～災害から命を守る自助・共助～	浦安市立高洲中学校 教頭 森田 弥 氏
	（4）帰宅困難・引き渡し ～自分とともに他人を大切にし 命を守る防災教育～	鎌ヶ谷市立第四中学校 教諭 海保 直樹 氏
	（5）自他の命を大切にするとともに 地域に貢献できる生徒の育成 ～防災教育と避難所運営をとおして～	香取市立香取中学校 教諭 藤田 伸平 氏
	（6）防災ボランティア	県立旭農業高等学校 教諭 中川 さや夏 氏
	（7）津波からの避難	県立天羽高等学校 教諭 角田 雅義 氏
	（8）避難所対応 ～自らの命を守るため 「主体的に行動する」児童生徒の育成～	県立我孫子特別支援学校 教諭 野口 由紀子 氏
3	講演者による事例報告の講評及び質疑応答	講師及び発表者

## 講演『地域の危機管理を、学校を核に考える』

南三陸町立志津川中学校教諭 佐藤 公治 氏

私は歌津中学校で東日本大震災に被災しました。歌津中は、防災教育チャレンジプランの実践校に内定しており、少年消防クラブのモデルクラブにも選出されていました。私は研究主任として、来るべき宮城県沖地震の津波に備え防災教育に工夫をこらすことが役割と考えていました。ところが、その矢先に震災が起こった。一度地殻変動が落ち着けば、津波はしばらく来ない。そのため震災後は、防災教育を行う意義を見失っていました。



しかし、震災後7月1日に、歌津中少年消防クラブの立上げについての生徒への説明の時に、このまちが好きな人手をあげて、と尋ねると、ほとんどの生徒が一斉に手をあげたのです。黒い津波が迫ってくるこのまちを、生徒達は好きだと言う。このことで私は、生徒たちが大人になったとき、この町で人々を守ることができる人材にするには防災教育が必要なのだと深く感じ、防災教育に従事しています。

地域の防災について、学校を核に考えるということの意味を、私なりに考えました。学校には地域の避難所という意味もありますが、人が育ちキャリアを形成する学校という場での意味合いは何か。

生徒への効果と言う面では、命にかかわる防災というテーマは、能動的な学習のきっかけを生徒に与えることができます。自ら動いて、自分で考える学習の効果が、期待できると思います。

一方で、防災の取組は本来大人の役割のはず。その基本の上で、子どもが参加することによる効果を活用するのは良いことと思います。子供が参加すると防災の取組みが活発化すると言うのはよく言われていること。

また、地域の防災は、学校を核としつつも、地域みんなで盛り上げていかなければならないと感じています。

私の目標は、自分の命を守ること、地域の人たちと助け合うこと。自助・共助ということばはできるだけ使わないようにしています。自助・共助は、公助を前提とした言葉。わたしは、公助はないものとして防災を考えることを伝えています。

震災後に、真っ暗なかでパソコンをつけて仕事をしていたとき、ある光景が頭に突然浮かんだことがあります。避難所には必ずあるものがある。遺体安置所。教え子が遺体安置所に運ばれている光景が頭に浮かび、涙が止まらなかった。こんな

光景は決して見たくない、それなら防災教育を必死にやろう、と感じました。

私のまちでは震災に、よく「津災」という字をあてます。東日本大震災でも、地震による被害はほとんどなく、被害はみな津波によるものでした。

宮城県の志津川地域は低地にあり、大きな集落は全滅といった状態で、死者・行方不明者も町の人口の5パーセント弱にのぼりました。歌津中学校は死者ゼロでしたが、4名の生徒が登校していなかったため、教員が安否確認に走りました。わたしも瓦礫の町を乗り越えながら生徒を探しました。

志津川中学校と歌津中学校は、志津川高校の中高一貫校です。志津川中学校区は大きな被害に見まわれ、志津川高校の生徒達が助けにいきたいと言うのを、必死で教員が押し止めました。助けにいきたいと言う生徒の気持ちは胸を打つが、教員として生徒が危険にさらされるような人助けをしろとは言いがたい。

新聞社の取材も受けましたが、生徒達が防災戦士であるというような紹介のされ方には抵抗があります。我々教員は生徒に人助けをさせたいとは考えていない、大人になったときに自分達や地域を守れるようにするのが防災教育の目標だと考えます。救助や防災は我々がやるべきこと。私は救急救命をさせることにも抵抗があります。救命行為は必ず助かるとは限らない、子どもの心に大きな傷が残ることになる。

私のいた歌津中学校では、職員・生徒に被害者は出なかったが、体育館が避難所になり、教室のなかは支援物資で溢れ、ボランティアのかたや報道機関、外部の方が溢れ、とても授業ができる環境ではありませんでした。そうした中で、生徒たちの心のケアと安全確保をどのようにするか、被災した生徒への生活支援をどうするか、課題はたくさんありました。夜勉強しようと思ってもなかなか環境が許さない中で、それでも三年の春には高校に入学させなければなりません。

また、職員からは、千年に一度の災害の記録を残したい、地域の方を励まさないと言われ、生徒も元気にならないなど、いろんな意見が出ました。

結果、我々は、教員を四部に分けて災害へ対応する体制をとりました。「津災記録部」「教育相談部」「生徒支援部」「地域貢献部」といいます。

「津災記録部」は災害の記録を担当しました。しかし生徒に津波への作文を書かせることはできず、慰問のタレント等へのお礼状くらいにとどまりました。生徒へアンケートを実施したが、防災教育実施後、町を好きと言う数値が上がりました。生徒はこの町のために何かしたい気持ちが強いのです。

「生徒支援部」は生徒への様々な支援を担当しました。5月11日から学校を再開しましたが、制服を流された生徒が無理をして買わなくていいよう、全員私服にしました。生徒支援部の教員は、空き時間に、運動着やTシャツを集めて生徒に配

りました。飲み物や食べ物や着るものは、行政がある程度把握して支援してくれませんが、コンパスなどの文具を買うところがないのに困りました。そういった物資を、生徒支援部から発信し、全国から支援いただきました。

「地域貢献部」は、何かしたいという子どもの気持ちを活かして発信していこうと考えて、「歌中夏祭り」をやりました。昼からの登校にして、生徒を夜まで学校におき、夜祭りを学校で開催し、帰りはバスで送り届けました。地域の方とボランティアに協力いただき、浴衣は生徒支援部が文科省のポータルサイトから全国に発信して支援をいただいた。生徒がよさこい踊りを披露し、ペットボトルで作った灯籠を灯しました。生徒会長になにか話せと降ってみたら、戸惑っていたようだが、やりますと言い、朝礼台の上に立ち、生徒や地域の人がいっぱいいるなかで、立派に挨拶をしました。

#### —夏祭りのDVDを放送

おもちゃの花火のあと、本物の花火も上がりました。いつもの夏祭りのようで、震災などなかったようだと思います。いろいろな思いで子供たちも見ていたと思ういます。

実際の防災教育の話をしてします。歌津中では少年防災クラブを立ち上げ、文部科学省からモデルクラブの指定を受けたので、様々な援助を受けてやっています。

志願した生徒たちを中心として、全校生徒を少年防災クラブのクラブ員として位置付けています。

初年度の平成23年度は、仮設住宅に火災予防のチラシを配る活動を行いました。

平成24年度は、地域ぐるみで子供を育てる防災教育、そして生徒の人間的成長を目指す防災教育を目指しました。宮城県は志教育というのをやっています。防災教育には、学校教育としての道徳的視点が必要だと思います。防災的実践力、まず自分の身を守ろう、そして地域での自分の役割を認識しよう、という気持ちを育てることが大切です。そういう防災教育をやっていこうと、防災教育協力者会議というのを立ち上げています。防災関係の物品も随分支援していただきました。

平成24年度は、救急救命法の訓練を全校生徒に実施しました。ほか、傷病者搬送訓練、火を起こす訓練、がれきを撤去する訓練などを行いました。

道路をなんとかしないと支援物資も届きません。2トンタンクで土を舗装道路の上にもいて、一クラス連れてきて、ここは国道45号線、土砂で埋まっている、さあどうする、というと、子供たちが渋々と、これをどけろってことでしょ、と動き出す。やり始めはとても無理だと感じてしまうが、結構なんとかなる、こういうことを経験することで自信に繋がります。

また、穴掘りをして、生ごみを焼却処理する。男女もなく、スコップの使い方などに慣れていく。簡易トイレの備蓄もあったが、あまり使いませんでした。水は流れなかったが、バケツの水で水洗トイレで流して何とかになりました。

炊き出し訓練は、流れてきた鍋でご飯をたきます。サランラップにうつして、おにぎりにして、空いた鍋で豚汁を作りました。

本校の目玉は避難所運営訓練です。前日にオリエンテーションを行い、8時に、全員登校と言う名の避難をします。先生たちはお年寄り、生徒たちは40才という設定で、学校のものは全部使っていいが校長か教頭に断ること、というルールでした。

学校の体育館に、避難所となったときにやるべきことを張り出しておき、その中からできるものやってもらいます。避難人数の確認や、炊き出しや、飲み水の確保など。

翌年は祝日の早朝に実施し、住民230人が避難民として参加しました。学校から生徒に指示は出しません。ライフラインが止まったときに避難者は何を求めているか、怪我人に必要は支援とは何か、刻々変わる事態にどう対応するかを、自分たちで考えます。これは東日本大震災で避難所となった学校を目の当たりにした生徒が希望したことです。

また、お人形を要救助者という設定にして助ける訓練や、土嚢積みの訓練もやりました。終了後、消防所長から講評と、来年度への助言をいただきました。

この訓練は毎年実施しており、今年は10月14日に行いました。毎年同じプログラムですが、体育館が使えない設定にしようとか、ちょっと工夫しています。地域の方も、あああれね、と、面白がって参加してくれます。私たちはこの避難所運営訓練を通じ、生徒達が将来、家族や地域人を守るためにやらなければならないことがあるということ、一人だけでできることなど何もないということ、まずすべきことは自分の命を守るということだということを、伝えていきたいと考えています。

宮城県で実施している志教育の調査では、この訓練をやる前と後で、人間関係形成力が向上しています。防災教育は、将来の夢を描く、キャリア教育的な効果があると感じています。

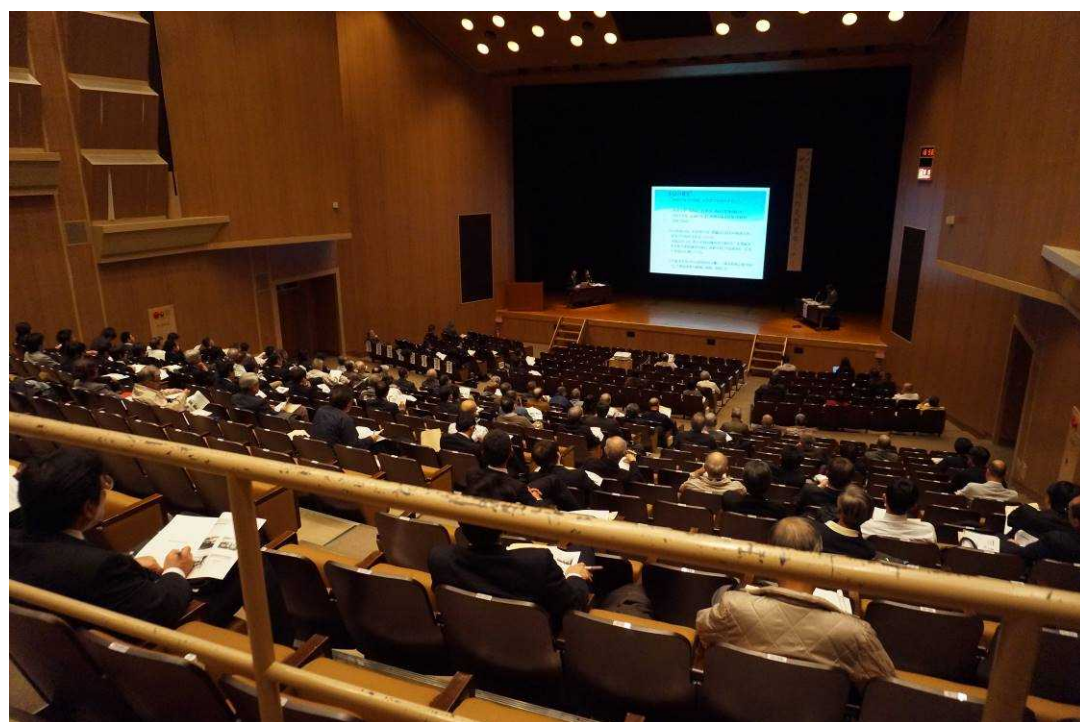
## 防災教育モデル事業事例報告

学校種に応じた地域との組織作り、防災訓練、防災教育の実践の取組について、事例報告を実施しました。

※事例報告は下記のホームページでご覧いただけます。

URL : <http://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/anzen/saigai-anzen/index.html>

千葉県ホームページ: ホーム > 教育・文化・スポーツ > 教育・健全育成 > 学校教育 > 安全・保健・給食 > 学校安全 > 学校における防災教育



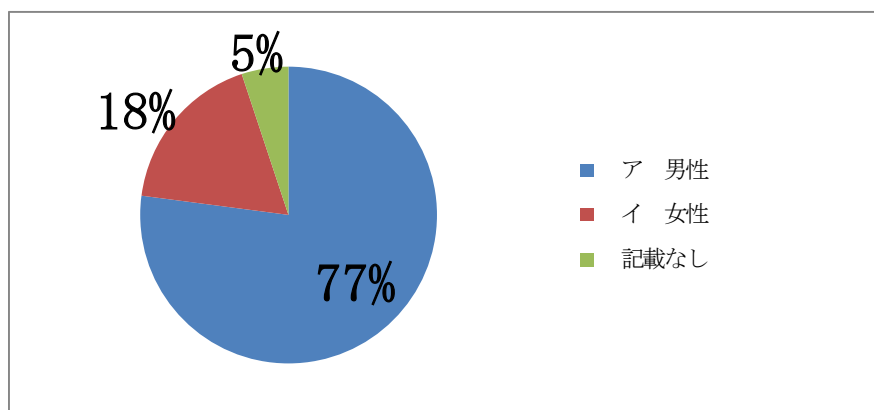
## 2. アンケート結果

今後の参考とするため、セミナーの内容等について、参加者に対しアンケートを実施しました。

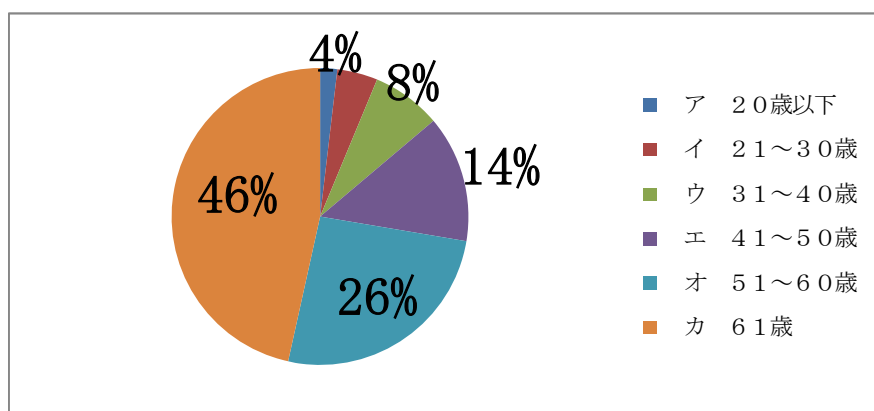
主な結果は以下のとおりです。

### (1) 参加者について

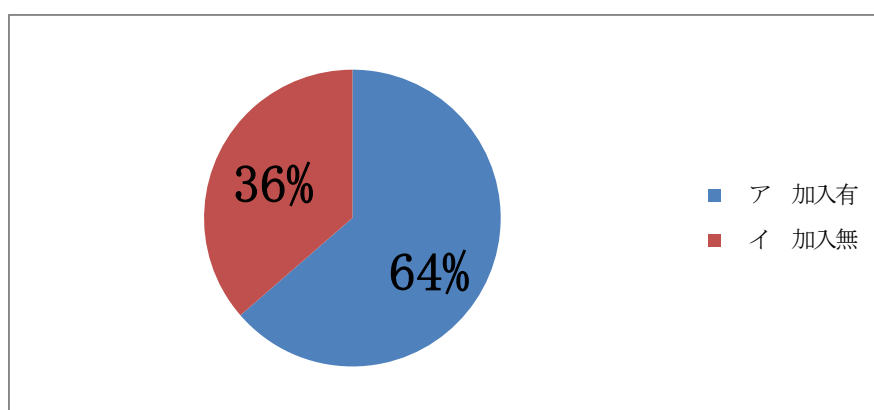
#### ア 性別



#### イ 年代

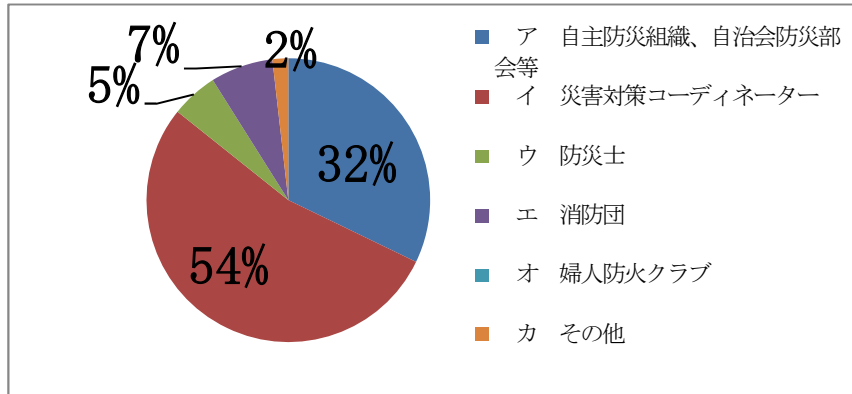


#### ウ 防災に関する組織への加入状況等



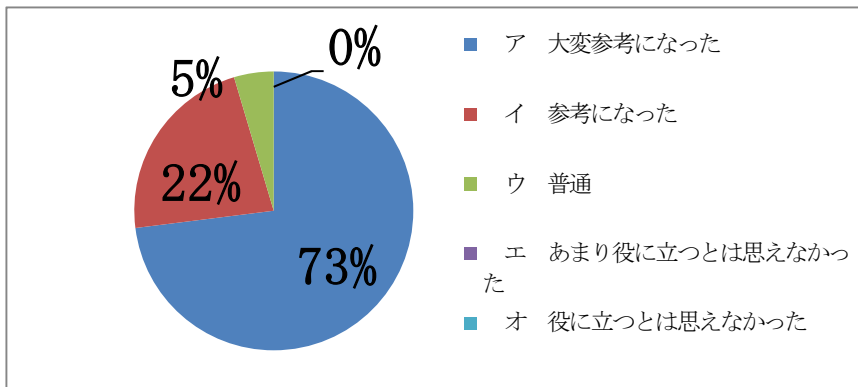


有の場合、加入している組織等（複数選択可）

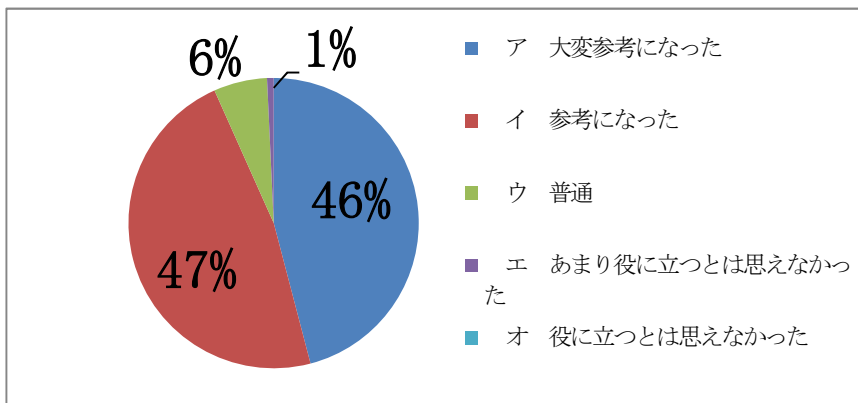


(2) セミナーの内容について

ア 講演



イ 防災教育モデル事業事例報告



イ 会場について

